

数日後。

薄く降り積もった雪が、クレールの朝を白く染めている。

吐いた息が空気にほどけて、マフラーに顔をうずめた。

薬屋リーファの玄関先には、^{ほうき}箒を手にしたルルの姿が見える。

「ルル」

その名を呼ぶと、はじかれたように彼女は顔をあげた。

「ツバメ。おかえりなさい」

ルルは箒を立てかけ、小走りでこちらへやってくる。

その表情は柔らかいものに、見えた。

許されたとはいえ、戻ってくることは歓迎されないかもしれないと思っていた。

なのに、どうして？

「薬は……どうだった？」

「ちゃんと効いたよ。母は寝たきりだったのが嘘^{うそ}みたいに、今、元気にしてる」

「そう……。よかったわ」

ほっと息をつく彼女に、俺は続けた。

「改めて、あの薬のすごさを知ったよ。それで、両親には薬のこと内緒にしてほしいって頼み込んだんだ」

「え？」

「それが俺にできる、ルルへの……償いだと思ったから」

そう言うと、青い瞳が丸くなる。

「本当はね、結構心配していたの。薬のことが広まってしまうんじゃないかって。でも、ありがとう」

「それは俺が言うべき言葉だよ」

一度だけ視線をはずして、また、彼女へ向き直る。
手を胸に添え、思いが届くように。

「俺を許してくれて、薬を渡してくれてありがとう、ルル。それから……君を傷つけて本当にごめん」

ルルが許してくれたとしても、自分のしたことは消えない。
彼女の顔を見ることができなくて、目を伏せた。

「……私は、あなたが思うよりも弱くないわ」

けれども。

ルルの言葉に驚き、顔をあげると、彼女は困ったように笑っていた。

◇

傷つかなかったわけじゃない。
それでも。

「傷ついたって、向き合い続ける。それがリーファの薬師^{くすし}であり、私なの」

「ルル……」

薬をツバメに託すと決めたこと。
あなたを、許したこと。
その理由のひとつに、この気持ちはたしかにあって。

「私、あのとき……あなたのこと嫌いになれないって言ったけれど、本当はね」

どんなときでも、誰とでも。
まっすぐに向き合わなければ、伝わらないから。

「ツバメのこと、好きなのよ」

こはく
琥珀色が大きく開かれ、朝日を捉える。
きれいだと、思った。

「俺は……。俺、そんなふうに思ってもらえる人間じゃ、ないよ」
「どうして？」
「だってルルに見せていた態度も、言葉も、本物じゃなかったから……」

彼の声は、自分を責めるようだった。

「じゃあ……今、私と話しているあなたは、本物？」

息をのんだツバメは黙り込む。
けれど、しばらくのあと——ゆっくりとうなずいた。

「うん。今の俺は……本当、だと思う」

「じゃあこれからの毎日で、もっともっと『本当のツバメ』を教えてくださいの」

「え……？」

「ちゃんとあなたを知って、それでも好きだと思えたら……もう一度、気持ちを伝えるから」



私は小指を持ちあげた。

「そのときに、返事を聞かせてほしいの」

まばたきがひとつ、ふたつ。
だけど、次の瞬間には、小指を差し出してくれた。

「うん。……わかった」

指先はゆっくりと絡まり、たしかに結ばれた。
ほほえめば、ツバメもぎこちなく笑みを返してくれる。
それは見たことのない表情で、これからもこんなツバメに、何度も
出会うのだろう。
それが、楽しみだと思った。

「それじゃあ今日からまた、よろしくね」
「よろしく」

ふたりぶんの白い息が高い空に消えていく。
吹き抜けた風に、少しだけ、春の気配を感じた。

エンディング B 【雪解けを待つ花】